

小学校外国語活動における内容言語統合型学習
の授業計画試案：本物の素材を使用して

黒 澤 純 子

愛知東邦大学

小学校外国語活動における内容言語統合型学習 の授業計画試案：本物の素材を使用して

黒澤純子

目次

1. はじめに
2. CLILの歴史とその内容
3. 先行研究と本稿の目的
4. CLILを導入した授業計画案
5. 今後の課題

1. はじめに

文部科学省（以下、文科省）は平成25年12月13日、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省、2013）を発表した。その目標は、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る」（文部科学省、2013）とし、以下、グローバル化に対応した新たな英語教育のありかた、グローバル化に対応した新たな英語教育の目標・内容等（案）と、グローバル化という言葉が強調されている。

ここで、グローバル (global)、あるいはグローバル化 (globalization) という言葉の定義を確認したい。Block (2008) は、Giddens (1990) や、Held, McGrew, Goldblatte & Perraton (1999) らの定義を視野に入れた上で、globalizationを“ongoing process of the increasing and intensifying interconnectedness of communications, events, activities and relationships taking place at the local, national or international level.” (p.31) と定義している。またMaurais (2003) は、英語で書かれているウェブページとその利用者の使用する言語について比較した。そしていかに英語が他の言語と比較し圧倒的に使用されているかを数字で示し、以下のように“Globalisation, accompanied by the spread of English, already positions and will continue to position countries having English as a majority language in an ever more special position” (p.25) と、英語の普及に伴ったグローバル化、そして今後の英語は大多数の言語として特別な位置を維持し続けるだろうと述べている。このような英語の位置を考え、さらにBlockが述べている国際的なレベルにおいて、進行過程の様々

な活動とつながりを持つために、その手段として日本の小学校段階からグローバル化を意識した教育が必要になってくるのであろう。

このような状況の中、外国語活動の全面実施（2011年）から4年目に入った今、小学生の児童たちは外国語活動の授業についてどのような感想を持っているのだろうか。文科省は日本英語検定協会が行ったアンケートを元に「外国語活動の現状・成果・課題」を発行した（文部科学省、n. d.）。アンケートの中の児童と生徒との英語学習に関する状況の項目をみると、児童たちは英単語や英語の文をより読んだり、書いたりしたいと思っている、という結果が出ている。具体的な数字は、英単語を読みたいと思っている児童たちが、77.9%、英語の文を読みたいと思っている児童たちが77.6%、英単語を書きたいと思っている児童たちが81.7%、英語の文を書きたいと思っている児童たちが78.6%（文部科学省、n. d.）と8割近い児童たちが外国語活動の現行の内容より、さらに学びたいと望んでいる状況であることがわかる。

児童たちの置かれている環境にもよるが、以上のような児童たちの感想からさらに外国語活動の内容を奥深いものにしていく一つの方法として本稿では、外国語活動の目標となる学習言語（英語）と教科を同時に学習するContent and Language Integrated Learning（CLIL：内容言語統合型学習；以下、CLIL）を導入した授業計画を提案したい。まず、CLILの歴史と内容について概観する。次に、実際日本の小学校でCLILを導入する場合、どのような内容の授業が可能なのか授業案を提示し、最後にCLILを導入するにあたっての課題について考えたい。

2. CLILの歴史とその内容

CLILは様々な言語が使用されているヨーロッパの言語事情に加えて、国際化、グローバル化が進んでいく中で、学生たちが国際的なcontextに立てるようにするための方策（Dalton-Puffer, 2007）であった。ヨーロッパ諸国におけるCLILの導入についての可能性を探るため、European Commissionが1990年代の初期から調査に乗り出した（Navés, 2009, p.25）。その際、Content Based Instruction（内容重視の指導、以下、CBI）、immersion, bilingual educationという指導法すべてをCLILという一括りの指導法とし、1996年フィンランドのJyväskylä大学がCLILでの指導法に着手した。

Dalton-Puffer（2007）は、CLILを“educational settings where a language other than the students’ mother tongue is used as medium of instruction”（p.1）と、生徒の母国語以外の言語が指導の手段であると定義している。またCoyle（2002）はCLILについて、言葉（言語知識や言語の4技能）と学習する内容（他教科や専門のトピック）を効果的に結びつけることで児童（学習者）の意欲を引き出す可能性や学習の相乗効果を図るものと考えている。そしてその指導法を“...a powerful pedagogic tool which aims to safeguard the subject being taught whilst promoting language as a medium for learning as well as an objective of the learning process itself.”（Coyle, 2002, p.27）と、教えられている教科を学習することを目的とする強力な教育学上の手段であると同時に、学ぶ過程

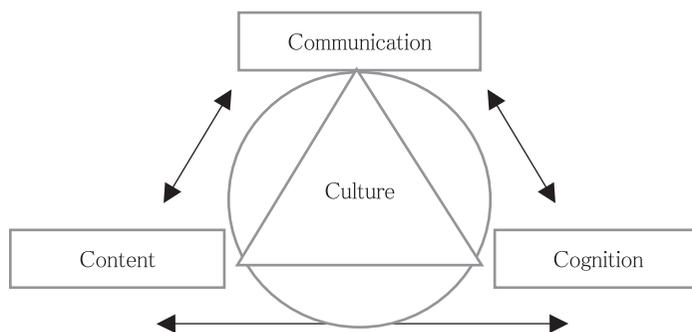
自体の目的と同様に学ぶための手段としての言語を促進している（筆者訳）、と述べている。

教科の学習と言えば、CBIが念頭に浮かぶが、CBIは元来、アメリカの第2言語としての英語（ESL：English as a Second Language）環境の下で英語母語話者の教師が指導するためのものであった。特定の内容（教科の学習）と言語指導の統合（Brinton, Snow, Wesche, 2003）で、その指導の目標は、“content-based instruction aims at eliminating the artificial separation between language instruction and subject matter classes which exists in most educational settings”（Brinton et al, 2003）と、言語指導と教科学習の人為的な仕切りを排除することを目標にしている。

一方、CLILとは、ヨーロッパのEFL（English as a Foreign Language：外国語としての英語）環境の下で、非英語母語話者の教師が指導する方策である。指導の目標はCBIとほぼ同様である。指導者が非英語母語話者であるということと、英語をEFLとして学習していることが日本の外国語活動と同じ状況ではあるが、日常で英語を使用する機会の頻度やその使用目的はヨーロッパ諸国と日本の状況とは違う。そのため、小学校の外国語活動の時間に全面的にCLILを導入するのではなく、2020年週3回（程度に増える）の授業のうちの何週かでCLILを試験的に行い、児童たちの学習意欲を高めながら英語学習の推進をはかることを目指し、小学校での言語（英語）の学習、英語以外の教科内容の学習、そして学習スキルを学ぶCLILの指導法を取り入れる授業について考える。

具体的にCLILで指導するにあたって、Coyle（2006）は4つのCを柱と考えた（資料1）。それらはContent（内容）：subject matter, Communication（言語）：the language of and for learning, Culture（文化）：international understanding including awareness of self and otherness, Cognition（思考活動）：the thinking integral to high quality learningの4つである。これら4つの要素のバランスをうまくとること、中でも自己と他者理解を含む文化間の認識が基礎になることが重要だとしている。さらにCoyle（2007）は、4つの柱のうちCommunicationの中の学習時に使用する言語について1）学習の言語（language of learning）：教科のテーマや内容を学習者が理解するために必要な語句や文章表現、2）学習のための言語（language for learning）：周囲の状況に応じ、学習活動

資料1



Coyle (2009). An interactive model : 4Cs Framework for CLIL
を修正して引用

するために必要な言語、つまり教室で学習するために指導者の指示など理解するのに必要な英語やグループ活動で使用する言語、3) 学習を通しての言語 (language through learning) : 1) と 2) が結びつくこと、語彙をさらに増やすために辞書を使う、宿題のために自身で検索を行うことなど (Coyle, 2006) と分類し、学習者が言語と学習内容を積み上げていくよう段階を設けている。小学校での外国語活動の授業ではまず、1) の学習の言語のインプットと 2) の学習のための言語を理解することを目標にしたい。

3. 先行研究と本稿の目的

日本で小学校の外国語活動にCLILを導入した先行研究としては二五 (2014) が、小学校高学年の児童のクラスを対象に社会の内容を取り入れた。授業では算数の計算も取り入れ、時差の計算という高度な内容に至るまでの授業を行い、その可能性を報告している。綿密な授業計画が練られ実践された上で、児童たちの学年の学習内容と可能な限り平行した内容で、CLILを導入する授業の計画を本稿で立案することは可能なのだろうか。

ここで、小学校指導要領の外国語活動の目標を確認する。「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」(文科省、2008年、p.7) とある。この目標の「言語や文化について体験的に理解を深め」ことに注目したい。Carrió-Pastor (2009) は、“The notion of teaching and content should be inseparable. Furthermore, language is the expression of an individual’s thoughts and culture; as a consequence, all these three concepts: content, language and culture are linked in social interaction (p.39) と、学習の教科内容、言語、そして文化は社会の相互作用の中でつながっていると述べている。そして Carrió-Pastor は、Coyle の 4 つの概念の中の文化を重視し、敢えて Culture, Context and Language Integrated Learning (CCLIL) と呼び (2009, p.43)、Culture を前面に出している。以前筆者は、言語を学ぶにはその背景となる文化について認識することの重要性について述べた (黒澤、2014)。また文化の重要性を主張する研究者たちの中でも Byram (1994) は、“...cultural learning has to take place as an integral part of language learning, and vice versa. The mere acquisition of information about a foreign country...is inadequate as a basis for education through foreign language teaching” (p.5) と、文化を学ぶことは言語を学ぶ上で不可欠なことだと述べている。

上記の理由から本稿では、地理の知識や社会の情報の伝達のみをCLILの指導で行うのではなく、本物の素材 (authentic materials) を使用して社会と算数を取り入れた内容で他文化に触れること、他文化を認識し、体験することの大切さに重点を置いて授業計画を作成したい。また英語にあまり興味がない児童にとっても、*Hi, friends!* 1 で学習する世界の国々と国旗は、カリキュラム上同時期に社会科で学習する世界の国々と国旗と呼応するため、外国語活動の授業の中で社会科との共通点を見出すことにより、英語にも興味を持ち、指導上使用されている英語を聞こうと

する姿勢を持つことにも期待したい。

具体的には、カナダのスーパーマーケットと文具の本物のチラシを教材として使用することにより、児童たちに好奇心を刺激し、文化の認識を喚起させることをねらいとしたい。学習の活動は、チラシに掲載されている食べ物と文具を *Hi, friends!* 1 の中に出てくる、あるいは児童たちが日常目にしていてる日本の物と比較し、類似点、相違点を考えることを通し、2つの国の背景にある文化の違いを児童たちに認識してもらおう。次に外貨（カナダドル）についての学習をし、チラシに掲載されている物の値段を調べ、英語で値段を言う。最後に品物の価格をカナダドルから日本円に換算し、英語で答える活動を行う。

4. CLILを導入した授業計画案

上記で述べてきたことを元に、5年生の外国語活動における授業計画案を考えたい。この際計画案は、Coyle (2006) の主張する4つのC (content, cognition, communication, culture) を項目ごとに分けて進めていく。

ねらい (目的)

1. 教科書に出ている世界の諸国の中からカナダを取り上げ、世界地図上での場所、首都、話されている言語、有名な観光地について学ぶ。
2. カナダで使用されている紙幣、硬貨について学ぶ。
3. 現地のスーパー、文具店のチラシを見て、日本の物と比較し、類似点、相違点を見つける。また、値段の表示も確認する。
4. 児童たちが興味を持った物をチラシから選び、その値段を英語で言う。さらに、カナダドルで表示されている値段を日本円で換算してみる。

目標

指導目標	児童たちが学習し、達成する目標
Content <ul style="list-style-type: none">・カナダの地図の中に主要都市をいくつか記し、児童に首都を選択させる。・現地の店のチラシ（食品、生活用品、文具）を使って日本と比較し（量、値段、色彩、表示法などの観点から）考察する。・算数で小数点の掛け算を習得している時期と重なるので、ドルから円への換算を行い、外国語活動の時間でも、さらなる計算の練習の場とする。	<ul style="list-style-type: none">・カナダの首都は国土の中で東西南北のおよそどの方角に位置しているかを確認する・カナダには10の州と3つの準州で成り立っていることを学習する。・重要な単語、先生の質問の英語を理解するための文章を覚えること。いずれの項目も先生のサポートを受けながら行う。

<p>Cognition</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童に身近な食品、生活用品、文具などについて日本と比較し考察する。 ・外貨（紙幣と硬貨の種類）についての説明と可能ならば外貨を提示する。 ・小数点を含む掛け算をする。（5年生の算数で習う小数の計算と呼応） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらい（目的）の3の活動において、チラシの実物を目にする事で文化の違いの認識をする。 ・何が違うのか。どのように違うのか、など。 例：大きさ、量、発色などの観点から。 ・量り売りの食品、食品の重さはg（グラム）やkg（キログラム）だけではなく、lb（ポンド）で表示されている食品もあることを確認する。 ・外貨（紙幣と硬貨の種類）の理解 品物の換算をすることで、カナダと日本の品物の値段が同じであることや違いがあることなどを認識する。
<p>Communication (language of learning)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で使用する基本的な単語：country, capital, Canada, province (州), territory (準州), supermarket (アクセントに注意)、sightseeing spot, money, coin, bill, grocery (食べ物の個別の名前：grapes, apples, bananas, oranges, watermelons, blueberriesなど)、stationery (文具品の個別の名前：notebooks, pens, rulers, pencils, erasers, backpacksなど), coins, bills (外貨の説明時), east, west, north, south (地図中の方角を答える時に使用) ・10以上の数字の確認をする。(例：資料2のチラシにあるブルーベリーの商品、\$3.99, 同チラシのポテトチップス \$11など) <p>(language for learning)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・値段を言う活動の流れで、2つでいくら、という値段の言い方を教える。2 for \$10, 4 for \$11 など。 ・外貨：ドルとセントの説明と、実際に品物の値段を言い具体例を示す。 ・品物の値段を質問する。 How much is ~? It's ~. ・繰り返し使用される基本的な疑問文 Where is ~?, What is ~? など 	<ul style="list-style-type: none"> ・単語や授業で繰り返し使用されるフレーズを覚える。 ・カタカナで使用されている果物 (bananas, oranges, grapes, apples) など、英語のアクセントなどとは異なることを認識し、正しく学ぶ。 ・先生にサポートをしてもらいながら、品物の値段を英語で言う。
<p>Culture</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本物のチラシ（資料2,3を参照）を見ることによって、児童たちが日本とは違う食材や文具を発見し、文化の違いを認識することを促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本のチラシと比べて、チラシ自体の大きさ、色彩、掲載されている食材や文具などの掲載の仕方の違いなどを気づかせる。

<ul style="list-style-type: none"> ・チラシに掲載されている肉や魚料理は、調理例である。(日本と大きな違いの例として) 日本のお惣菜のようにすでに調理されて売っているわけではないことを述べる。 ・カナダの小学生はランドセルではなく、自分の好きな大きさや柄のバッグバックに必需品を入れて学校に通う、など日本との違いを事実として述べる。 ・洗剤などの詰め替えの量を日本と比較する。(食器、衣類洗剤の詰め替え量はカナダでは4.43Lが主流であるなど。) ・コンピューターなどを使って、さらにカナダについて、あるいは教科書に載っている他の国についても児童たちに調べさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チラシを見て、日本と同じように売っている食材やもの、売っていないものなど、児童が発見して説明できる。 ・詰め替えものの量を日本のものと比較する。他にも日本と大きく異なるものはないか、チラシを見て探す。 ・日本で売っている詰め替えものの量がわからない場合は宿題として家で、あるいはスーパーなどに行って調べてくる。
---	--

資料2 Save on foods

August 14 to 20, 2015, p.1のチラシの一部



資料3 Walmart

August 6 to 12, 2015, p.2のチラシの一部



小学校の45分間の授業で以上の授業案のうちどれくらいの内容まで進めていくことが可能なのか。実物のチラシを見ることで、指導者が予想していなかったような児童たちの発見や気づき、質問が出るかもしれない。また、品物の日本円への換算の活動時では、計算が苦手な児童にとって小数の計算に時間がかかれば、授業の進度を遅らせることになるかもしれない。そして、小数の計算をした上で、さらに英語で答えるという学習段階は、児童にとってチャレンジしていく内容であるため、指導者は児童たちのサポートにも力を入れ、励ましながら進めていくこと、そして児童たちが達成した内容については評価することが重要になるだろう。

CLILでは指導する言語は主に英語だが、複雑な文章や難しい単語を使わなくてはならない状況の時には、日本語で説明することは当然必要である。理想としては、繰り返し使用される基本的な疑問文を児童たちがインプットし、児童たちの発話（指導者の問いに対する答え）につなげていくことである。児童たちが問いに対して何が問われているのか、どのように答えていくのか、文章の意味を理解して発話につなげていくには、まずは母語である日本語のリテラシーと読解力を確実につけることも非常に重要である。CLILでは学習目標言語と教科の両方を学ぶという点で、一般的な外国語の授業の勉強よりも高度であるため、母語のリテラシーの問題と密接につながってくるとCoyle (2006, p.10) も述べている。

授業案を元にして授業を数回行うだけで、児童たちの思いのままに英語で発話するまでには至らないかもしれない。しかし、外国の本物のチラシを目にすること、自分たちの身近な品物と比較する活動は、児童たちの知的好奇心を目覚めさせ、他文化を体験することにつながるのではないだろうか。本物の素材として使用することで、児童たちの他文化への関心や興味は無限に広がるであろう。

5. 今後の課題

現時点で考えられる課題を以下に記す。

1. CLILによる指導を導入することは、科目を教える教員と言語（外国語活動の場合、英語）を教える教員の協力、そして科目間の連携が必要である。第一に、科目内容を指導するにあたって、その指導力が必要であることである。指導者についてDalton-Pufferは、“...teachers will normally be nonnative speakers of the target language. They are not, in most cases, foreign language experts, but instead content experts...” (2011, p.183) と、CLILの指導者は外国語に精通している教師ではなく、教科に精通している教師だと述べている。しかし実際にCLILを導入するには一部とは言え教科を英語で教えるため、教科に関係する語彙が必要になる。このため、英語という言葉教える教員と教科を教える担任教師とのチーム・ティーチング (Team Teaching) が今まで以上に必要になってくるのは必須であろう。
2. CLILの教科書がない、またあったとしても日本の小学生を対象にしたものではないため、内容が難しく小学校の授業では実際には使用できない。そのため、授業の準備のために教員の負担が大きくなることは間違いない。チーム・ティーチングを行うに当たっても、打ち合わせの時間が必要になり、指導者同士がどれくらいの時間がとれるのか、またどれくらいの時間を費やさなければならないかわからない。ただし、言語は意味のある文脈で学ぶことで成功するのであって、文脈から文法や語法などだけを取りあげて単独で教えることではない。そのため、教員にとっても「どのように言語と教科の内容指導をするかの土台となる十分な計画が必要」(Swain, 1996, p.544) になるであろう。
3. 現役の教員研修において、また教育課程履修の学生もCLILでの指導を可能にする内容を学ぶ必要性が出てくる。さらに、常に安定した指導ができるように学校の体制も整えることが大切である。そして、児童の親との関わりと助けも必要となり、どれくらい子供の学習に関わりを持つことができるのかも重要であり、学校、教師、家庭の連携が鍵になるであろう。
4. 小学校高学年と言っても、まだ日本語が完成していない児童たちが英語で他教科の内容を学習することへの不安がある。CLILを導入して成功している国と比べ、日本の小学校でどれだけ英語と他教科に効果を与えるのかは未知である。
5. さらに、英語で他教科を学習した場合、第一言語の日本語と英語で学んだ教科に好ましくない影響が出る可能性はないか (Dalton-Puffer, 2011, p.197) という疑問も出てくる。1989年か

ら中学1校でCLILを導入し、2006年から2007年の学年にCLILを導入校が90校に増えたオランダでは、英語はCLILで学習していない生徒より英語力がつき、母語、そして他の教科に何の否定的な結果は出なかった（Graaff, Koopman, Anikina and Westhoff, 2007）という研究がある。しかし、アジアという文脈で考えた場合、国を挙げてCLILを導入したマレーシアの小学校ではうまくいかなかった例（笹島、2015）を見ると、日本でも慎重に考えなくてはならないだろう。しかし、外国語活動が軌道にのっている今、児童たちの知的好奇心を喚起し、外国語学習の興味を広げていくためにも、教科内容を取り入れた日本独自のCLILの授業を年間数回でも導入していくことは望ましいかもしれない。

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省、2013）に基づいて、2020年から教科化され、授業時間数も週3回（程度）に増える外国語活動であるが、実施まであと5年ある。授業時間数が増えることで、今以上に指導者は負担を強いられることは予想できるが、現状の外国語活動の内容にとどまるのではなく、少しずつさらに上を目指した、児童たちの学習意欲を掻き立てることができるような授業内容、そして今後中学での英語にスムーズに移行できるような内容の授業を目指し、確立することを望む。

引用文献

- Block, D. (2008). Language education and globalization. In S. May & N. H. Hornberger (Eds), *Encyclopedia of language and education*, 2nd edition, volume 1: Language and political issues in education. (pp. 31-43). Boston: Springer Science and Business Media LLC.
- Brinton, D. M., Snow, M. A., & Wesche, M. (2003). *Content-based second language instruction*. Michigan: The University of Michigan Press.
- Byram, M. (1994). *Cultural studies in foreign language education*. Clevedon, UK.: Multilingual Matters Ltd.
- Carrió-Pastor, M. L. (2009). Cultural diversity in content and language integrated learning (CLIL). In M. L. Carrió-Pastor (Ed.), *Content and language integrated learning: Cultural diversity*. (pp. 31-46). Switzerland: Peter Lang.
- Coyle, D. (2002). Relevance of CLIL to the European Commission's language learning objectives. In D. Marsh (Ed.), *CLIL/EMILE - The European Dimension: Actions, Trends and Foresight Potential*. (pp. 27-28). Public Services Contract DG EAC, European Commission, Strasbourg.
- Coyle, D. (2006). Content and language integrated learning: Motivating learners and teachers. *Scottish Languages Review*, 13, 1-18. From <http://www.scilt.stir.ac.uk/SLR/Issue13/SLR13Coyle.pdf>
- Coyle, D. (2007). Content and language integrated learning: Towards a connected research agenda for CLIL pedagogies, *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 10 (5), 543-562.
- Coyle, D. (2009). Promoting cultural diversity through intercultural understanding: a Case study of CLIL teacher professional development at in-service and pre-service levels. In M. L. Carrió-Pastor (Ed.), *Content and language integrated learning: Cultural diversity*. (pp. 105-124). Switzerland : Peter Lang.
- Dalton-Puffer, C. (2007). Discourse in content and language integrated learning (CLIL) classrooms. The Netherlands : John Benjamins Publishing Company.
- Dalton-Puffer, C. (2011). Content and language integrated learning: From practice to principles? *Annual Review of Applied Linguistics*, 31, 182-204.

- Giddens, A. (1990). *The consequences of modernity*. Cambridge: Polity Press.
- Graaff, R., Koopman, G., Anikina, Y., & Westhoff, G. (2007). An observation tool for effective L2 pedagogy in content and language integrated learning (CLIL). *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 10, (5), 603-624.
- Held, D., McGrew, A., Goldblatt, D., and Perraton, J. (1999). *Global transformations: Politics, economics and culture*. Cambridge: Polity Press.
- 黒澤純子 (2014) *Hi, friends!* における『文化』の指導について：言語指導における文化体験をコミュニケーション能力につなげる 『東邦学誌』第43巻 第1号、153-165.
- Maurais, J. (2003). "Towards a new linguistic world order". In J. Maurais & M. A. Morris (Eds.), *Languages in a globalizing world*. (pp. 13-36). Cambridge: Cambridge University Press.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社
- 文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htmより採取
- 文部科学省 (n. d.) 「外国語活動の現状・成果・課題」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/05/01/1347389_01.pdfより採取
- Navés, T. (2009). Effective content and language integrated learning (CLIL) programmes. In Zarobe, Y. R. & Catalán, R. M. J. (Eds.), *Content and language integrated learning: Evidence from research in Europe*. (pp. 22-40). Clevedon, UK.: Multilingual Matters Ltd.
- 二五義博 (2014) CLILを応用した二刀流英語指導法の可能性—小学校高学年児童に社会科内容を取り入れた指導を通して— *JES Journal* 14, 66-81.
- 笹島茂 (2015) 『CLIL新しい発想の授業』三修社
- Swain, M. (1996) Integrating language and content in immersion classrooms. *The Canadian Modern Language Review*, 54 (4), 529-548.

受理日 平成27年 9 月29日